
勇者と魔王は協定を結んだ。

異崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王は協定を結んだ。

【Nコード】

N1931Y

【作者名】

異崎翔

【あらすじ】

純粹熱血單純馬鹿な勇者と、体力皆無だが知識は多い爆乳魔王が協定を結び、世界の变革目指して国を作ったり戦争したりそうでなかつたりな話。

第一部（前書き）

突発的に書いてしまった作品です。
暇つぶし程度にでも読んでくださったら幸いです。

第一部

酷く美しい、妖艶な容姿を持つ、だがその顔は実年齢よりも幼く見える齡16の少女がいた。

漆黒の長い髪に、全てを見透かしているかのような青い瞳。頬は淡いピンク色をしている。そして形の良い唇。

出るところは出て、締まるところはしまっている、まさに女が求める肉体美の持ち主。

どちらかといえば華奢な方だが、年相応の男ならば目の行かないものはいないだろうと予想されるほど、彼女の大きな胸は強い印象をあたえた。

髪と同じく、漆黒のドレスに身を包んだ彼女は、水晶に映る男を見て微笑む。

彼女は魔王だ。

世界を畏怖^{いふ}で支配する、唯一無二の存在。

彼女の視線の先、水晶の中には一人の平凡そうな男がいた。平凡だが、右腰に柄の良い剣をおさめ、胸を張り歩くその姿は堂々たるもの。

表情はキッと引き締まり、前をこれでもかと言つほど見据え、大地を踏みしめ歩行する。

純粹で、正しいと思つたものは絶対貫く、いわゆる熱血。

人間の勝手な解釈を押し付けられ、それでも希望を託してくれた皆に報いようと必死に目的を遂行しようとする、魔王にとっては愚かな生物、勇者。

「もう少しで勇者が来る……」

自分を倒しにくる、つまりは自分の邪魔者でしかない勇者という存在。

だがこの魔王様は、勇者にとっても興味があった。

一刻も早く、勇者にあいたかったのだ。

「ううつ、寒っ」

一瞬、寒々しい視線を感じて、勇者は身震いした。

「誰かが俺の噂でもしてんのかな？」

いくら勇者といえど彼の実年齢は17。その軽い口調と外見を裏切

らぬものだった。

茶色い、すこし寝癖のついた短髪。170センチいかどうかの、男性にしては少し小さめの身長。

右腰には代々勇者にのみ伝わっているという紋章のついた、美しい剣。

彼は驚くほどの良い姿勢で、淡々と歩を進めている。

「着いた……」

彼が見上げる視線の先には、魔王の城と呼ばれる、絶壁の崖の上に立つ高い塔。

周辺にはまがまがしいオーラが放たれている。彼は生唾を飲み下すと、魔王の城に足を踏み入れた。

中に入ると、いつの間にか立ちはだかっていた魔物に目がいく。

紫色の、血色の悪そうな肌の色に、細く、つりあがった瞳。

醜く歪むその口元から見える、とがった牙。

「ウツシエツシエ、人間だ人間！」

美味そうな生肉だぜ！ ヒヤッハーツ」

汚らしい、頭の悪そうな言葉と共に、我が身を投げてくる魔物。

それに微動だにせず、彼は。

「ヒエ？」

最後。

魔物は小さな声をもらし、上半身と下半身が真っ二つに切り裂かれ、緑色の血しぶきを噴出しつつ地に倒れ付した。

微動だにせず、ではない。

ただその動きが早すぎて、見えなかったのである。

彼は魔物が飛びついてきた瞬間、右腰の剣をすばやく抜き、見事としか言いようのない剣術で相手の肉体を真つ二つに斬った。

そして二度ほど剣を上下に振ると、剣についた気色の悪い緑の血を払い、また剣を鞘に戻したのだ。

どれだけ鍛錬しようと、才の無い者にはできない芸当であった。

彼は無残に散った、大きく目を見開きながら倒れている魔物の肉体を見ると、苦虫を噛み潰したかのような表情をして一言呟く。

「糞っ。魔物のクセに生意気な」

それは先程のような少年らしい口調ではなく、憎悪の対象であるかのごとく、低い声で呟かれた。

そして、視線を前に戻すと、また歩き始める。

緊張気味に、だがしっかりと。

それもそのはず。

この先には待ちに待った、魔王がいるのだから。

人間達を長く苦しめ、それを見下し高らかに笑っているであろう魔王が、突如現れたただの人間でしかない若造に倒される。

それほど滑稽なものは他に無いだろう。

勇者は緊張と、自分が振り返ちに合うかもしれないという不安。

この手で、悪の元凶を滅ぼせるという嬉々とした感情。

魔王の姿を見れるという期待を抱えながら、前を見据える。
きつと魔王のことだから、他の魔物たちと比べ数倍大きく、醜く、
小汚い性格をした闇の塊のようなものなのだろうと推測する。

彼は小さく深呼吸して、己の感情を閉じ込めるかのように、また歩を進めた。

予想に反して、うじゃうじゃいると思われた魔物は少なかった。
罨ではないかと、意識を集中させながら、目の前にある扉を見る。

ほかと比べて豪華な扉。

おそらくこの中に魔王がいるだろう。

またあふれ出しそうになる数々の感情を押し込めるかのごとく、彼は扉を開いた。

が。

「おう勇者よ！ やつときたのだな！？」

目の前に立ちふさがるは、己よりも少し年下くらいの、華奢な少女。
彼女は漆黒の衣類に身を包みながら、嬉しそうに駆け寄ってくる。

「間違えました」

勇者は一言言うと、その豪華な扉を勢い良く閉じた。

爆乳美少女を幻覚で見てしまうほど、俺は欲求不満だったのか……！？

確かに長らく女との縁は無かったとはいえ、これほどまでに欲の強い男ではなかったと自負していた。だが、現にあんな少女の幻覚を見てしまったのは、顔と肉体の反比例するロリコンワールドへの欲全開ではないか。

彼はその一瞬の出来事に頭を悩ませながら、真の魔王のいるであろう部屋を探した。

第二部

勇者はその邪惡な欲を振り払うかのように頭を左右に振ると、強く頬を叩いた。

「……………」

もちろん、鍛え上げた自分の腕力に挟みうちで殴られ、痛くないわけがない。
ジーンと赤くなる頬をさすりながら、少し涙目で魔王のいる部屋を探す。

だが、他のどこを探しても魔王らしきものはいなかった。
いるのは皆雑魚ばかり。
と、そこで。

彼に一つの疑問が浮かぶ。

あの美少女は、魔王に囚われた人間の可愛そうな少女ではないのか？

そもそもこの魔王の城と呼ばれる險惡な塔にあんな人間の女性がいるはずもない。

自分が現れたことで頬を赤く染め、嬉しそうに駆け寄ってきた少女。

「……………」

己の浅はかさに反吐が出る。

彼女は自分が来るのをずっと待ち望んでいたのだ。

魔王の手から開放され、一刻も早く親元に帰りたいだろうに。

自分はなんてことをしてしまったのだと、悔やみながら着た道を急ぎ足に引き返す。

寄ってくる魔物たちをことごとく無視し、やっとのことで戻ってきた豪華な扉の前。

ごくり、と生唾を飲み干し、扉を空けた。

そこにはやはり先程の、けしからぬ肉体を持った美少女がいる。

彼女はまたもや勇者を見つけると、嬉しそうに駆け寄ってきた。そして、

「やっと戻ってきてくれたのだな、勇者よ！」

初めて交わした言葉と似たり寄ったりの言葉を口にする。

やはり彼女は自分が来るのを待ち望んだ、魔王の被害者なのだ。元気そうなその姿にほっと一息ついていると、彼女は言った。

「よし、勇者よ。

私と手を組まぬか？」

「もちろん」

勇者は即答する。

自分は勇者だ。困っている人を見捨てておけるはずがない。必ず魔王の手から逃がして見せる、と心で決意した。

「本当か!？」

それは嬉しいな。てつきり勇者は魔王である私と手など組まぬと思
っておった。

今回の勇者は頭の柔らかい者なのだな」

「そんなにほめられると……って、え？」

魔王は若干小馬鹿にしたような言い草だったが、勇者はそれには気
づかずに、意識を彼女の違う言葉へと向けた。

彼女は今、「魔王である私」と言っただろうか？

最近女との縁がなさすぎたのかもしれない。幻聴が聞こえる。

彼女は囚われの姫。勇者が助け出すべき大切な存在であるはずだ。
そのはずなのだが……。

「今、なんて？」

「頭の柔らかい者なのだな」

「その前」

「今回の勇者は」

「もつと前！」

「魔王である私」

「それだ！

『魔王にとらわれた私』ではないのか？」

彼女はそんな当たり前なことを聞くな、とでもいいたそんな表情で
勇者を見つめた。

「ああ、正真正銘、私が現在の魔王だ」

それに、勇者は多大な悲鳴をあげることとなる。

「はあああああ!？」

あんたが魔王だと!？ 魔王が女だなんて聞いてないぞつ！
さてはお前、魔王の影武者として操られているんだな？」

ならばすぐにでも開放しなければ。

そう決心する純粋な少年^{ゆっしや}は、右腰に携えている陰を少し触る。

それに対して目の前の爆乳美少女は、

「お前は馬鹿か？」

とどめの一言を刺した。

やっと勇者が現れ、己の目的のために手を組むことができると、嬉々としていたのにも関わらず、目の前の魔王に対して現実逃避を働くような男が勇者では、少し頼りない。いや、とても頼りない。

彼女ははあ、と息を吐くと、真直ぐに勇者を見つめた。

それに勇者も真直ぐに彼女を見つめる。

そこには、とても緊張の含まれた雰囲気がただよっていた。

魔王が目の前の勇者に殺気を放ち、それに瞬時に反応した勇者が鍛錬の賜物とでも言えはいいのだろうか、常人にならばその残像を捉えることも難しいほどの速さで、軽く触れていた剣を抜いた。

それを遅れて確認した魔王は、一人で納得したように頷き、少し微笑んだ。

「ほう。この殺気に反応するか」

「……?」

魔王が少し不気味に微笑むと、それに勇者は過剰反応する。
相手は少女とはいえ、魔王。

この世界に住む人間達を苦しめ、高らかにあざ笑っているような魔物の頂点に君臨する者だ。

勇者は決意を固くすると、剣を構える。

「女を手にかけるのは本意ではないが。

魔王となれば話は別だ。お前にはここで死んでもらうぞっ」

それに魔王は、

「あ、ちよつと待て」

駆け出そうとしていた勇者を制止した。

それを聞かずにその首を飛ばしていればあっさりと魔王を討伐できたものを、この勇者は純粹ゆえに、動きを止めてしまう。

「なんだ？」

用が済めばお前を斬る。勇者の目はそう語っていた。
だが魔王は落ち着き払った表情で一言言った。

「私はぶっちゃけ強くない」

「は？」

「確かに殺気を放ったり医療系統の魔術を使ったりするのは得意だが、伝説の魔王等のように『一瞬で国を炎の海に！』とか、そういうことは不可能だ。

あと、体力もない。自慢ではないが物心ついたときからこの塔にいるのだ。走ることはおろか、長距離を歩いたこともない。この細腕を見ればわかるであろう」

そういつて自分の細腕を見せる魔王。と、同時にその胸が揺れ、思春期男子の欲望を強くさせる。

どうにか抑え、確かに自慢にはならないかと、紛らわせるかのように勇者は同意した。

第二部（後書き）

お気に入り登録してくださった方、感想を下さった鍵猫さん、ありがとうございます。

まだ名前が出ていませんが、二話後あたりに出る予定なので、今しばらくお待ち下さい。

第三部

「……で。」

自分は強くないからと、俺との戦いを放棄するのか？」

魔王のクセに。

最後心に思った言葉は言わないことにした。

いや、魔王だからだろうか。

魔王だから、小汚い手段を何策も用意しているのかもしれない。油断したうちにグサリ、なんてことがあってもおかしくない。

高まる緊張を押し隠すように、勇者は魔王を見つめた。

が、対する返答は拍子抜けするものであった。

「いや、実際お前と戦うつつもりは毛頭無かった。

最初に言ったであろう。よく来てくれた、私と手を組まないか、と。私は目的のためにお前の力をかりたいのだ。

そのためならば、私は己の身をお前に売るつもりだ。

目的が済み次第、煮るなり焼くなり強姦するなり、好きにすればいい」

最後のはいらないのではないか、と一瞬思ったが、彼女の瞳から目が離せなくなり、思考を止める。

魔王の意志は固い　　そう思わざるをえなかった。

彼女の瞳の奥に感じる強い意志。

いくら勇者が鈍い存在だとしても、それくらいの事とはわかった。
だが、

「俺は勇者だ。人間達を救うために、お前を倒さなければいけない」

「そのためならば、私や、魔物たちを殺してもいいと？」

殺す 嫌な言い方をするな、と思いながらも彼は答える。

「必要とあらば」

「魔物も、生きているのだぞ？」

皆が皆、人間の集落を襲っているようなものばかりではない」

「……………しかし、そうしなければ人間はずっと不幸なままだ」

勇者が旅に出る前、勇者となると決意したときに教わった魔物たちの悪事の数々。

自分が勇者でなくとも、どうしても見過ごせないものがあつた。

それに反して魔王は可愛らしい顔をしていながらも、つまらなそうに吐き捨てた。

「ふん。」

人間も小ざかしいまねをする」

肉体と顔が一致しないような外見。

そんな容姿で、彼女は大人びた、少し逆らいがたい何かを感じさせる口調で呟く。

それに勇者の火がついた。

「なんだと……？」

「天賦の才がある純粋な……いや、単純馬鹿を勇者に選び、魔王を消し去ろうという魂胆か。
己の手を汚さずに」

「なに……俺は単純馬鹿ではない！」

「そこに突っかかってくるのも単純馬鹿の証拠だ。
そもそも、自分が勇者に選ばれるという時点でおかしいとは思わないのか？」

「う……」

魔王の一言に何も言い返せなくなり、ついた火が消されたような気がした。

最初は、なぜ俺が？ とも思った。
だが、だんだん話を聞いていくうちに勇者は自分にしかできない大役だと思い、引き受けたのだ。

心中察するかのように魔王が口を開く。

「上手く丸め込まれたか。
そういえば、お前は我等を殺しつくさない限り人間は不幸になる、
といったな？」

「そうは言っていない」

すかさず反論する勇者に、彼女は間髪入れず続けた。

「似たようなものだ。」

ならば問うが、魔物が人間の集落を襲い、人々を殺したらお前はど
うする?」

「倒しに行く」

「では、何もしていない魔物を、人間の勝手な都合で大量虐殺され
たら?」

「……………」

答えられない勇者に、魔王は口角を上げた。

上手い具合に乗せられているとは気づかずに、勇者は下唇を噛む。

「おや。勇者とは正義のヒーローではないのか?
それとも、お前は種別に差別をするのか?」

「違う! 俺はそんなことはしない!」

「そうか、なら」

彼女は不適に笑む。

そして、全てが計算通り、とても言うかのような表情で、言った。

「人間も魔物も幸せにするために、私と手を組まないか？」

それに押された勇者は、答える。

「……………とりあえず、話を聞こう」

それに魔王は、その顔に似つかない、酷く妖艶な笑みを浮かべた。

第三部（後書き）

次回、魔王と勇者の名前がやっとな！

お気に入り登録ありがとうございます。

紅月 空様、v a z様、感想ありがとうございます！

第四部

勇者を、とりあえず「話し合い」という状態に落とした魔王は、言った。

「では、とりあえず自己紹介からといこうか。
いつまでも勇者、魔王と呼び続けていては疲れる」

その大人びた口調に、勇者は答え、言われたとおりに自己紹介を始める。

「ああ。

俺は八神^{やがみ}・ライトリークだ」

「私はクリフォンス・フレイア。『フレイア様今日もお綺麗ですね』
と言いながら靴を舐めれば特別に、踏んでやらんこともないが」

死んでもやらねえよ！ と、ツツコミたい衝動をなんとか勇者は
いや、ライトリークは抑える。

それを察したのか、少し頬を赤らめながらフレイアは一言言った。

「冗談だ」

そして、ライトリークの名に興味を示したのか、問う。

「八神？」

「あ。 ああ」

その一言に、目の前の少女が何を問いたいのかが一瞬にしてわかった。

それはライトリークの性格などとは関係なく、今までの生活から悟ったものだった。

「俺は一応、国の十貴族の中の一人、八神家の当主の一人息子だ。次期後継者とも言っべきか」

十貴族とは。

ライトリークの住まう国、レイフォント大国の貴族の中でも多大な権力を握る、十の貴族たちのこと。

十貴族の姓には一から十の数字が必ず入っており、彼らは血縁を最重視している。

血縁を重要視しているとはいえ、十貴族は名ばかりではない。それぞれ実力を持ち、国の明日の方向へと導くために惜しみなく財力や権力を提供している、実力派の貴族たちだ。

例になるのが、ここにいる八神・ライトリークという少年。

彼の家は国立から長らく代々国王を支えてきた、剣術を主とする由緒正しき家柄である。

初代は国立に全力を注ぎ、助け、八代目は国の戦乱の危機をその華麗なる剣術で救ったという。
他にも数々の実績を挙げてきている。

結果、今では剣術で八神家の右に出るものはいないとまで言われ、王の信頼も厚いものだ。

現在、当主は21代目、ライトリークの父にあたる。
いずれは父も老い、22代目をライトリークが継ぐことになるだろう。

「ほう……」

フレイアから、感嘆の息が漏れた。
それもそのはず。

魔王の塔と呼ばれるこの塔に住まう魔物を、立ち向かった魔物等は低俗とはいえ、一瞬にして倒した男。

どこで剣術を訓練したかと思いきや、代々伝わる八神家の後継者だったとは。

おそらく幼少期より辛い訓練を受けてきたのだろう。

それは、このか弱き少女にも手に取るようにしてわかった。

だが。

「己の素性を簡単に相手に明かすのはどうかと思うが」

「う……」

ライトリークは彼女の一言に一瞬ひるむ。
が、このまま負けては先程の二の舞だと、反論に出た。

「先に自己紹介をすると言い出したのはお前だろっ！」

「別に強制はしていない」

「……っ」

しかしすぐさま撃沈。

どうにかして目の前の頭の回転の速い少女を負かせないかと考える
が、彼にはいい策が何一つ思いつかなかった。話し合いという方向
においては。

「次期後継者がこれでは、先が思いやられるな」

「……」

上手くいけば今後の相方となるであろう男には辛い一言をぶつける。

そうなのだ。

あまり頭回転が良くない故、簡単に勇者になれと丸め込まれ、魔王
の城に一人でくるなんて馬鹿なことをしてしまったのだ。

父はきつと、そんな息子をふがいなく思っているに違いない。
これでは後継も危ういかもしれない。

それは、昔から思っていたことでもある。

一時期は勉学に励んだこともあったが、どうも彼には合わないらしい。

一般的な貴族の知識以上のことを吸収するには無理があった。

そのせいか、彼は父との訓練時くんれんどき以外でもいつも剣を振り続け、己を剣術一筋で磨いてきた。

彼の今の実力は確かに天賦てんぷいの才と、血の滲むような努力あつての賜たま物である。

頭の悪さは彼のコンプレックスの一つであつたが、逆に目の前の少女には嬉しくもあつた。

頭がよければそれはそれで良いと思つてはいたものの、剣術の力がその分劣つていては話にもならない。

頭は自分が補えばいい。

彼女の欲ほつするものは、確かな腕の実力であつた。

その実力があると見受けたから、彼女はこうして勇者に話し合いを用い、手を組もうとしている。

己の目的のために。

「では、本題に入ろう。ライトリーク」

少し嬉しそうに言う少女に、ライトリークが一瞬とは言え、目を奪われたのは不覚だつた。

第五部（前書き）

作者に専門知識はありませんのでご了承ください。

第五部

そして彼女は妖艶な笑みを浮かべながら、近くにあったイスに座る。

今まで彼は魔王のことしか見ていなかったが、少し余裕ができるとあたりを見回した。

踏み心地からしてもかなり高級品だとわかる、トマトジュースのよ
うな深紅のカーペットが広い正方形の部屋全体に敷かれている。
ずっと眺めていると酔いそうなくらい、目に痛々しく映る。

丁度部屋の真ん中に直径150センチくらいの丸いテーブル。その
近くにイスが二つ。一つはすでにフレイアが足を組みながら座つて
いる。

フレイアの奥には、黒いベッド。

浅黒いカーテンのようなものが上から釣り下がり、その中で大きな
ベッドの上に、端にフリルのついた黒い布団がかけられている。

お姫さまベッド、と似たような形状だ。

窓も大きく、その向こうは少しの陸地を過ぎると、深緑の巨大な海
が広がっていた。

今更ながら、ほんのりと塩味のする風が流れていることに気づく。

なぜ？ と、少し首をかしげていると、フレイアが周りをキョロキ

ヨロと見だしたかと思うと首を傾げだした、拳動不審なライトリークという男に言った。

「お前は変態か。」

乙女の部屋をじろじろと見回すな」

言葉は冷たいが、その顔は少し赤く染まっていた。

「え、ここお前の部屋なのか!？」

……趣味悪……」

「ここで死にたいか？」

「やれるもんなら」

そう言って、ライトリークは剣に手をかける。
実践なら自分に分がある。

彼女は戦闘において、あまり強くない。いや、弱いといっても過言ではないかもしれない。

先ほど自分で言っていたように、彼女からは『戦闘ができます』という雰囲気は全くないのだ。

自分が勝てると、そう確信しているからこそ強気にでれるのだが。

「お前に殺される前に、私がお前を殺せばいい。

忘れたか？ この塔にはもっと強い魔物がうじゃうじゃといる。

それに私が医療系統の魔術が得意だとも言ったであろう。
大腿動脈から適当にホルマリンに近い物質を注入すれば、お前は生

きていられないぞ」

当然のように言うフレイアに、ライトリークは首をかしげた。

「……………えっと、悪い。途中から話がわからなくなった」

「これだからお前の頭は弱いんだ」

「なんだと？」

ため息交じりに言うフレイアをライトリークはきつく見据える。

「お前それでも貴族だろう。」

少しは勉強に励んだらどうだ」

「励んださ！ 一時期は……………」

語尾がだんだんと弱まり、彼女は二度^{ふたたび}ため息をついた。

そして一から説明してやる、といわんばかり上からの口調で、

「どこがわからない？」

と聞くものだから、彼は答えた。

「大腿動脈から」

「大腿動脈は、ももの内側を通っている、鉛筆ほどの太さの動脈だ。
…あとは？」

間髪いれずに答える魔王という生物に、ライトリークはさらに声を荒げる。

「うるさい！

俺だって一般常識くらいはきちんと学んだ！」

「ならば問うが。一般常識ができるなら、お前にも解けるはずだ。問題、『店で1000リツチの物入れを10個買ったら三割引におまけしてくれた。支払い金額はいくら？』」

「……………ちよつと待て」

彼は抱えた頭をさらに強く抱え、その低レベルな問題に挑む。

（一個1000リツチのものを10個買ったから、全部足すと100、200、……………1000だろ？
そこから三割引……………）

「できた！」

不意に立ち上がった少年の顔は、満足そうに笑んでいる。
できたことが、相当嬉しかったのだろう。

「答えは、623リツチだ！！」

その答えが正当なものかどうかは置いておくとして。

「ド阿呆。なぜそんな複雑な答えになる。700だ」

「…………っ!？」

「そんな、馬鹿な、みたいな表情でこちらを見つめても答えは変わらない。」

これでわかっただろう。お前は本物の馬鹿だ」

勝ち誇ったように言うフレイアに、ライトリークはもう一度頭を抱えた。

そこには、陰から眺めている一人の女がいることを知らずに。

第六部

フレイアはライトリークを馬鹿馬鹿と罵ると、少し満足げに頷く。

「うん、それでこそ勇者だ」

「意味がわからん」

反して彼は、不服そうにフレイアを見つめる。
そして彼の中に疑問が浮かんだ。

こんな魔王がいて、大丈夫なのか？

もちろん他者からすれば、こんなのが勇者で大丈夫なのか、という疑問が浮かぶわけだが、あいにく彼にはそれを知る由も無い。
それを幸運ととるかどうかは決めがたいことだ。

ライトリークは妖艶な笑みを浮かべる一人の華奢な少女を改めて見据える。

「で、お前の目的はなんなんだ？」

「ん？」

彼の発した言葉に、彼女は何のことだ？ とでも言いたそうな表情をする。

「目的に俺の力が必要だから、俺と話し合いなんて言い出したんだろっ」

「あ……ああ、そうだった。話から脱線していて、すっかり忘れていたよ」

そういつて、小さく笑むフレイア。

ライトリークはそんな彼女を見据え、切り出すのを待っていた。

ここで彼が言葉を発し、話をややこしい方向へと導いてしまったのは、また罵られることが目に見えているからであろう。それを知ってか知らずか、彼女は再び小さく笑むと、すぐに真剣そうな顔つきになった。

「率直に言おう」

少しの間をおいて、彼女は言葉を続ようとする。その少しの間が、ライトリークには何十秒という長い時間にも感じた。

ゴクリと生唾を飲み込む。そして、彼女の口が開く。

「私と手を組んで、世界を滅ぼして欲しい」

「……………はあっ!？」

ライトリークは奇妙な声をあげた。あまりにも予想外すぎる言葉だった。

もちろん彼に、フレイアの目的を予想付けるヒントはほとんど無かったに等しいが、それにしてもぶったまげた話だった。

「世界を、滅亡……？」

「ああ」

「……それがお前の企みなら、俺はお前を倒さなければならない」

彼は勇者。

人の生を守るために仲間を経て旅をし 最終的には一人であつ

たが 魔王の城へと足を運んだ勇敢なる若者。

人の生を守るために活動してきた彼が、世界を滅ぼすなどできるわけが無い。

むしろ世界を滅ぼそうとするものがいれば、その元凶を壊してこそ勇者。

戦う意思はないと言いながら、自分の前で世界を滅ぼすなどと言い放った魔王に、怒りがこみ上げる。

奴は俺を騙したんだ、と。

彼は真直ぐに彼女をにらみながら、腰に携えている剣に手をかけた。

一方、勇者を怒気させた魔王は、予想通りとでも言いたそうな、涼しげな表情で今にも剣を抜きそうな彼を制止する。

「まあ待て。」

話を最後まで聞かんか」

「なんだ。言い訳なら聞かないぞ！」

「言い訳ではない。言い分を聞けといっているのだ」

どちらも似たようなものなのだが。

「……そうか、それなら聞いてやろう」

あっさりライトリークは頷いた。

彼が頷くのを分かって言ったのか否かは、定かではない。

しかしフレイアは満足げに微笑むと、先ほど言おうとしていたであろう言葉を続けた。

「私はな、何もこの世界の生物ごと全てを滅ぼそうと考えているわけではないんだ」

「？」

意味が分からない、という表情をするライトリーク。

その顔からは、『世界滅ぼすというのは生物も何もかも全てを殺すことではないのか？』という疑問が手に取るように分かった。

「そうだな、言い方を変えよう。世界を再生　　いや、変革とい
うべきか。」

一度この腐った世界に終止符をつけて、新たに世界を作る」

「……变革……」

「ああ。」

今のこの世界を眺めてみる。腐りに腐りきっているであろう？

権力者達は私利私欲に財産や兵等を使い生き延びる。それに反して平民達は権力者の気まぐれに振り回され、理由は多々あれど生命^{いのち}を落とす。

犠牲の上に成り立つ、哀れな雑草たちの生き延びる世界だ。

魔物達も、決して平和ではない。小さな幸せすらも、小汚い低俗に潰されているのだ」

その言葉には、自然と重みがあった。

幾つものそれらを見てきたような、悲しそうな瞳をする少女。

齡十六の少女が言う言葉にしては、現実味があり、それと同時に彼にも同意せざる得ない内容も含まれていた。

ライトリークが魔王の城に来るまでの間、幾重もの町や村、国を見てきたが、幸せそうに暮らしている裕福な土地はわずか一握りでしかない。

領主や国王よってその集落の裕福さが決まるほどだ。

権力者達が贅沢をするほど、それに嘆く民がいる。

『犠牲の上に成り立つ哀れな雑草』

それは驚くほどに、今の権力者達の大勢と重なっていた。

第六部（後書き）

だんだん方向性が変わってきてしまったので、タイトルを変えようかと思っています。

変えた後も、どうぞよろしくお願いいたします。

第七部

少しの沈黙が彼らの間に流れる。

やがて口を開いたのはライトリークであった。

「じゃあ……。その変革をするために、お前は何をするつもりだ？」

「世界を滅ぼすといっただろう？」

「それは聞いた。俺が知りたいのは具体的に何を成すか、と言うことだ」

「……………」

フレイアは少し考え込むようなしぐさを見ると、組んでいた足を一度直し、今度は逆に組みなおした。

ライトリークは黙って彼女の発する言葉を待つ。

「先程、私は世界に終止符を打つといった。そのためには、私は人間世界の絶対的な勢力と、魔界の最大勢力をうち滅ぼさなければならぬと考えている。」

だが、今の私達では最大勢力を倒すには圧倒的な力の差がある。たとえば私が知に優れ、お前が天賦の才に恵まれていようとものだ」

今、ちゃっかり自慢をしなかっただろうか？

そんな疑問が頭を駆け巡ったが、あえてライトリークは無視することにする。

「故に、まずは私達と共通の願いを持つ仲間を集めようと思う。最初はお前の仲間も一緒にこの作戦を決行するつもりだったのだが……」。

どうやらお前は仲間に捨てられたらしい」

ふふっ、と鼻で笑う魔王。

「捨てられたんじゃない！！ 俺の仲間達には……俺よりも優先すべきことがあったんだ！」

「ほう？ じゃあ魔王討伐よりも優先すべきことは頭の悪い勇者を捨て、カジノで遊ぶことか？」

含み笑いをしながらテーブルの上においてあった水晶を見せてくるフレイア。

それを覗き込むように見ると、金髪の見覚えのある優男のような下種が、女に囲まれながら金を賭け、ゲームをしている光景が入ってきた。

「く……っ、フェラルめ……」

そう、彼の名はフェラル。王都を出るとき共に旅を始めた仲間の一人だ。

弓矢の達人で、王都の中でも一、二位を争うほどの腕前。

別れ際の言葉は『僕は少しここで休憩していくよ。後で追いかける

から、先に行つてくれたまえ』

「あんの女つタラシが……！」

「どうせ見捨てられたのだろう。こんなむさ苦しい集団と見ていてイライラするほどの勇者には付き合つてられない、とかなんとかで」

「ぐっ……そんなはずは無い！……はずだ」

「なんだ。確信も無いのか。安い友情だ。……だが、お前と同じくらい、気配には敏感そうだ」

そう呟いた瞬間、少し冷たい視線でフェラルが水晶を通してこちらを向いた。だがそれもほんの一瞬で、本当に自分を映し出す何かに気づいたのか、それともたまたまだったのかは分からない。

そもそもこの水晶の仕組みすら分かつてはいないのに、ライトリークにそれが分かるはずもなかったのだ。

彼は一つ首をかしげると、もう一度水晶にうつる外見優男を見た。

整った金髪碧眼。一緒に旅をしていたときもそうだったが、彼の女からの人気度はこちらが羨むどころか、あきれるほどだった。

彼は自分をフェミニストだのと評していて、女性には基本的優しい。そのせいか、戦いになっても相手が性別上牝となると、手は出さない。少し困った性格の仲間だった。

「さて、と……」

ライトリークが食い入るように水晶を見てみると、フレイアが一言呟きながら立ち上がった。

そして視線はずらさずに、話していたときよりも少し大きめな声をあげた。

「メリア、いるのだろうか？　そろそろ盗み聞きなんてやめて出てきてはどうだ？」

「……………」

フレイアがいうと、ライトリークがクローゼットの方を見た。

ライトリークは、どうやらメリアとよばれた人物の存在に気づいていたらしい。あえて言わなかったのか、それとも面倒くさかったのか。

ガタツ、と音を立ててクローゼットが開く。

中から出てきたのは……。

「あら、気づいていらっしゃいましたか？」

女性にしてはわりと高めな身長、メイド服を着た人。黒髪を上の方で団子型にまとめていて、笑顔でこちらを見ていた。

「お前はいつも神出鬼没だからな。16年も一緒にいれば嫌でも分かる」

「そつでございませうか」

なんてこと無い会話のようにして受け流される。

だが、ライトリークには一つ解せないことがあった。

（なぜ……クローゼットから出てきたんだ……？　それも、フレイアの服をかぶって！）

そう。クローゼットはそれなりに広いから、隠れていたといえは頷ける。

だが、出てきたときの彼女は、自分の首もとを黒い服、おそらくフレイアの上着だともわれるもので覆っていたのだ。それもおもむろに臭いをかいでいる。

「フレイア様。私のことはおきになさらず、続けてください」

「ああ……もとよりそのつもりだ」

普通に、それが当たり前だったかのように話しを進めようとするフレイア。

「……………!!」

ライトリークは目の前の変態のような女性を横目に、なぜツツミをしないのかと全力で叫びそうになった。

「なんだ？　なにか言いたそうだな？」

「言いたいことはたくさんあるんだが！」

「そうか？　言ってみろ」

「……………っ」

それができないから困っているんじゃないか
ライトリークは
なんとか言葉を飲み込む。

（このメイドは変態か？　なんて聞けるわけない！）

変人を見るような目でライトリークがメリアを見つめていると、彼女はその視線に気づいたのか、ニツコリと微笑みかけてきた。

第七部（後書き）

今後も変態が増える予定です（笑

第八部

それにライトリークは苦笑を返す。引きつっていることは承知で。

「何も無いのなら続けるぞ？」

フレイアの言葉に、メリアとライトリークは頷いた。ライトリークの場合、渋々頷いたと言ったほうが合っているだろうが。

しかしそんなことには目もくれず、フレイアは二人の同意を確認すると、すぐにでも言葉を続けた。

「まずは同志を募^つらなければならない。それもより腕利きの者が必要だ。そのために、お前の『元』仲間を、もう一度仲間へと引き戻そうと思っている」

『元』を強調して言う意味がどこにあるのだろうか、そんなことを考えながらも、ライトリークはフレイアを見る。

確かに、個性が強い奴等だったとは言え、自分の仲間は腕利きばかり

りだった。

弓に長けたフェラルもそうだが、他にも魔術、体術等、何かしらに長けた能力を持つ者ばかりが仲間として旅をとみにしている。

それはライトリークも重々承知だ。自分の仲間が強い者たちであったことに変わりはない。
だが。

「なんで一緒にお前と手を組む前提で話が進んでいるんだ！」

「おや？ 組むから話を聞いたのではないのか？」

「違う！ 俺は話を聞くといいただけで、手を組むとは一言も言っていない！」

「開口一番に私と手を組むといたただろう」

「ぐう……っ」

確かに、言った。

囚われの姫と思い、彼女に駆け寄ったとき。

この女は人の揚げ足ばかり取ると、ライトリークは心の中で毒づいた。

苦虫を噛み潰したかのような表情でフレイアをにらみつけていると、彼女は冗談だ、と笑った。

「さすがにそこまで強引に話を進めるつもりはない。だが、手を組む可能性がゼロで無いからこそ、お前は私の話を聞く気になったのだろうか？」

「……………」

一つ、聞かせてくれないか？」

フレイアの問いに答えず、ライトリークは聞いた。

それに「いいだろう」と、彼女は座る大勢を直しながら答える。彼女のそのしぐさを愛おしそうにメリアが見つめていたが、ライトリークはメリアへのツッコミを『無視する』という方法で押さえ込んだ。

「なぜ、お前の作戦に俺が？」

自分で言うのはとても苦しいが、彼は自分の知能を他と比べずとも低いことを理解している。

どこの誰に言いくるめられるかもわからないライトリークを、たとえ剣術が優れていたとしても、わざわざ選んだ意味がわからない。

剣術の名家の子息だといえど、まだ若い。彼ほどの実力者ならばわざわざ王家側の人間でなくとも探せばいる、はずだ。だが、彼女は自分を選んだ。

それは勇者や魔王とは関係が無いのか。

それともたまたま対立しあい、いつかは顔を合わせる運命にあったからなんとなく選んだのか。

「お前にしてはなかなか質問をするではないか」

「御託ごたくはいい。答える」

「そうだな。 お前が剣術に長けていて、勇者で。それもかの有名な八神家の息子だったから」

やはり、そんな理由か。

八神家がレイフォント大国を裏切れば、少なからず国は動揺するだろうという魂胆だろう。

所詮、魔王とてその程度の考えしか ライトリークが内心毒づいていると、その思考をフレイアが止めた。

「と、思っていたのだが。どうやらその考えは一部でしかないらしい」

「は？」

「これは今の感情だが、そ、その……どうやら私は、お前のことが心底気に入ったらしくてな。

その……なんだ………とにかくだ！ お前の天賦の才と私の知能があれば、私の目的が必ずやいい方向へと導かれる気がしたのだ！…」

言葉をにこらせたかと思いきや、フレイアは突如叫ぶようにして早口に言った。

良くわからないが、俺は気に入られたのか？

ライトリークはその程度の考えでまとめると、フレイアの方を見る。うつむいていてよくは見えないが、少し赤く染まっている頬。その原因が暑さでないことくらいは想像できるだろうが、

「暑いのか？」

「違う!!」

女の経験が皆無に等しい勇者殿には、まだ難しい世界だ。

と、同時に、笑顔だったメリアの瞳が鋭く光った。その矛先はもちろん、ライトリークに向いている。笑顔ではあるものの、目が笑っていない。

一瞬寒々しい気配を感じ取ったものの、ライトリークは何かの勘違いだと自分に言い聞かせ、話を戻した。

「そうか。わかった」

「わかった……？ お前は私にあそこまで言わせておいて、自分の答えは保留か？ 手を組むのか、組まないのか。ハッキリしたらどうだ？」

先とは一変して、攻め立てるような眼差しを向けるフレイア。

困惑するライトリーク。

確かにフレイアの世界変革は今のこの世界に必要なだ。そうでもしない限り弱者が延々と惨めな思いをすることとなる。

しかし、自分はレイフオント大国という大きな権力を握る国の人間。それも十貴族という絶対的な王家側の人間だ。国立から代々国を助け、よき方向へと導くために剣術を学び、全身全霊をかけてきた八神家。その次期当主となるであろう自分が、ここで国を裏切るような行動をとってもいいのだろうか　　ライトリークの悩みは深まるばかりだった。

第九部

考え込んでから数分、フレイアは真直ぐにこちらを見据え、メリアもこちらを凝視していた。フレイアは純粹に回答を待つ。だが、メリアは忌々しいものを見るかのごとく痛々しい、冷たい視線を容赦なくぶつけていた。

それもそのはず。

己の愛しい主君がこれだけ懇願したにも関わらず、まだこの勇者は優柔不断に決断していないのだから。

しかし、メリアとて彼がそう安易に決断を下せる立場でないことは承知していた。

「勇者」という立場は押し付けられたものだと同もってフレイアから聞いていたのであまり気にはしていなかったものの、レイフォント大国の十貴族の一人、の息子。

レイフォント大国といえば、人間世界でも多大な影響力、権力を持っている国。

世界で一番大きいと言われるクレイアント大陸の三分の一の領土をレイフォント大国が占めている。

フレイアの目的に「人間世界の頂点を滅ぼす」という経過は必須。つまり彼は、フレイアと手を組めば頂点の一つとも呼べる自国を自ら敵にまわし、その上足蹴にしなければならないということになる。だが、今のこの世界が腐っていることはライトリークも思っていたことらしい。

証拠に、今彼は手を組むか否かで相当迷っている。

その様子を真剣に見るフレイア。

「フレイア様、お飲み物など如何でしょう？」

「あ……いや、今はいい」

「左様でございますか」

どうやらフレイアは、ライトリークが決断を下すのを根気強く待つらしい。

チッ　と、メリアは心の中で舌打ちをした。

「本来ならば早く決断して欲しいところなのだが……。急だということとは分かっている。一晩時間をやろう。真剣に考えてみてくれ」

フレイアは言うど、メリアにライトリークの寝る部屋を用意させた。これは城の魔物たちが騒ぐかもしれませぬ　　メリアはそんなことを考えるが、素直にフレイアの命に従った。

用意された、個室。

フレイアの部屋とはうってかわり、対照的に白いベッドと、灰色の床。あまりつかっていない部屋だったのか、少し埃^{ほこり}っぽかったが窓を開けるとすぐに埃は消えていった。

腰に携えていた剣をベッドの横に立てかけると、ライトリークは我が身をベッドに沈ませた。

勇者が魔王の城で寝るなど許されることなのだろうか、と考えるが、今は非常事態。

今までの会話でフレイアが人間消滅を狙っているわけでも、世界を支配し私利私欲に命を弄ぼうとしているわけでもないことを知った。それに、彼女の目的は先の先にある『平和』だ。それまでの過程はどうやら一筋縄ではいかなそうだし、惨い^{むご}血が流れることにもなるだろうが。

いや、本当に惨いのは私利私欲に弱きものの命を軽々と摘み取ってしまう意地汚い権力者達を自由にさせておくことが。

今のレイフォント大国は、強大な力を持つネアリフェイス大国やデイスフェイン帝国と協定を結んでいるだけあり、三大強国と呼ばれている。

それだけ力があるということは、敵にまわすとても厄介だということだ。

フレイアがいくら魔王であろうと、レイフォント大国等相手に勝てる勝率が限りなく低い。

それに自分はレイフォント大国に服従している一貴族だ。

自国を裏切るような行為が簡単にできるはずが無い。

ライトリークは悩んだ。

今までのことをたくさん思い出し、迷う。

家のこと。

国のこと。

自分の立場。

一緒に（途中まで）旅をしてきた仲間のこと。
旅の経過のこと。

フレリアと話した数々のこと。

フレリアの目的は大きく、無謀だ。

しかし彼女は人種を超えて弱者にも笑顔を咲かせようとしている。
彼女の言い方は所々横暴だったが、それでも彼女の瞳には信念がある。

そして、暗い闇がある。

あの年であそこまで世界を変えたがるのもなにかそれに関係しているのだろうか。

それはライトリークには分からない。

だが、彼女の目的や考えに『間違い』というものは存在しない。
ただ、それが『正解』かと聞かれれば、即座に頷けるものではなかった。

しかし。

一晩明けると、フレリア、ライトリーク、メリアの三人はフェラルを仲間にするべく、朝一に塔を出る。

フレリアは最初嬉しそうに頬を染めていたが、やがて元の表情に戻り、それに対してライトリークはなにかを決意したかのような、引き締まった表情をしていた。

第九部（後書き）

ここでおそらく第一章がおわりです。お気に入り登録、評価、感想、拍手などありがとうございました！
今後もよろしくお願いいたします！

ちなみに最後の描写ですが、メリアはもちろん愛おしそうにフレイアを見つめていたと思います（笑

第十部（前書き）

第二章です！ よろしくお願いいたします。

第十部

魔王の城、と呼ばれる禍々しい塔から東の方角にある、ライトリークの住まうレイフォント国含むクレイアント大陸。その中でも小さい集落と認識されているソレイン村では、決して小さいとはいえない騒動が起きていた。

まず第一に、ソレイン村の領主、ヴィレイスの死亡。

第二に、フェラル・リルチルドという弓の使い手を先頭にして起きた、反乱。

それらは一度に起きたことではない。

幾つかの月日をかけて、つもりに積もったソレイン村の怒りや憎しみから生まれたことだった。

だが、反乱のきっかけは一人の少女の父の死にあった。

時は少しさかのぼる。

フェラルという男が、ライトリーク含む勇者一行の仲間から外れた日。

この村のヴィレイスという領主は、村の税金を多く取り上げ、苦しくなった住人の生活にさらに追い討ちをかけていた。

カジノの導入。

それも、ヴィレイス等を専門とした、豪族のためのもの。たまに来る他の豪族達。

彼らの懐に入る金の素では全て、村の税なのだ。

ある日村人等の中の代表が、ヴィレイスに言った。

『これ以上は出せない。

税を下げてくれ』

と。

しかしヴィレイスはかまわずに告げた。

『出せるだろう。

税を下げる気は無い。

もしもそれでも税を出せぬと申すならば……、女が惨めな思いをすることになるぞ』

この村は小さいだけあって、若い女は少ない。

おそらくヴィレイスの言う『女』とは、彼女のことを指すのだろう。

「カリナ」

金髪碧眼の整った顔立ちの男、フェラルは言った。

片手に弓を持ち、背に矢を携え、服を血に濡らし、優しくも悲しそうな笑みを浮かべて。

その声に振り返る女。

美しい……と言うよりは、可愛らしいという言葉の似合う、15、6の少女。

ずっと泣いていたのか瞳は赤く腫れ、体は小刻みに震えていた。

無理も無い。

己の目の前で、家族が、たった一人の家族が無残に殺されたのだから。

フェラルの視線の先には、大量の血を腹部から流し、白目をむいて倒れている男の姿。

年は40代後半。

一般人が見れば、すぐにでも気分が悪くなり、吐き出すことが予想付けられる光景だった。

弓の名手といわれてきたフェラルでさえ、目を背けるほどに。

「ふえ、う……っ 父様が……っ」

彼女はフェラルの存在を確認すると、小さく嗚咽を漏らした。
目の前の父の姿から目を放さずに。

父様、といえど、彼女と目の前で横たわる男に血のつながりは無い。
すでに彼女の両親は死んでいる。

血のつながりは無くとも、彼女にとってはたった一人の家族だった。
彼は村を代表してヴィレイスに意見したばかりに、最悪の死を迎えた。

彼は一刻程前に『税が出せぬなら女が惨めな思いをするぞ』と告げた
領主に会いに行き、ヴィレイスの思考に反する言葉を述べた。

娘の身と心を守るために。

しかし、結果的にどちらも彼の手によって守られることは無かった。
彼が死ぬことによって彼女の精神は揺れ、今後どのみちヴィレイスは
彼女に手を出すと思われることから、身も危ういところだ。

フェラルは何も言わずに、カリナという最愛の女性を抱きしめる。

カリナは声をあげて、一晩中泣き崩れた。

カリナが泣きつかれ、眠りについたとき。

フェラルはカリナの父の遺体を丁寧に土に埋め、それと同時に、村人達の堪忍袋の緒が切れた。

第十一部

魔王の城から東へ向かい、五日目。

ライトリーク、フレイア、メリアの三人には（夜はしっかりと睡眠と取りつつ）五日間歩いているというのに、疲労の色が見られなかった。

ライトリークは旅慣れしているから問題ない。

メリアは未知の能力を秘めている（と、ライトリークは思っている）から良し。

だが、魔王の城から出ず、中でもまともに歩いたことの無い貧弱なフレイアが、どうしてここまで歩けるのだろうか。

自分でも体力はないといっていたのに対し、この状況。

もしかしたらフレイアよりもライトリークのほうが疲れているかもしれない。

なぜこんな貧弱な魔王が、汗水たらさず初めての旅を継続できるのか。

ライトリークは納得ができなかった。

「おい、フレイア」

「ん？」

声をかけるが、余裕そうな表情で返してくるフレイア。
それにライトリークはまゆを動かす。

「なんでお前はくたばっていないんだ？」

「何が言いたい？ 貴様は私がそこら辺でのたれ死ぬような魔王に見えるのか？」

失笑気味にフレイアが言うと、間髪いれずにライトリークは答えた。

「見える」

「ほう……。死にたいか？」

「やれるものなら」

ライトリークは剣に手をかけ、フレイアは殺気を放つ。

一瞬で空気は一変し、ジリジリと痛い雰囲気の流れ出した。

それは、常人ならば足がすくみ、動けなくなるほど。

ただ、今、ここに常人という部類に属される生物は存在していない。

彼らの周囲に、大きな風が吹いた。

「と、言いたいところだが」

フッと殺気を消すと、フレイアは足元を指差した。

ライトリークは殺気が消えたことを確認すると、剣から手を離し、指に沿って視線を下に向ける。

と、どうだろうか。

彼女の足は地面についておらず、浮遊しているではないか。

彼女はその人並みはずれている魔力で自分の体を地面から浮かし、体の『体力』というものを使わずに旅をしていたのだ。

もちろん使わないのは体力であって、普通ならばずっと浮遊している方が疲れるのだ。

魔術を使うにはそれ相応の『魔力』と『精神力』が必要になる。

彼女がいま使っている魔術は浮遊の魔術だが、これまた高度な技術がないとできない芸当だ。

魔力を一定の量、一定の場所から放出し続けることで浮き、さらに行進と逆の方向に魔力を放出し、地面を押すことで前方に動く。

それをするには強力な、安定した精神力と、多大な魔力。それを使いこなす技術が必要になる。

だが、魔術に関してあまり知識を持たない彼は、叫ぶように言った。

「おまつ！ それはずるいぞ！ 俺が旅し始めたときはどれだけ苦労したと思っている！？」

「そんなこと知るか。いったであろう？ 私は弱い、と。
か弱いフレリアちゃんが一時間も歩き続けられると思うか？」

「……………」

「……………なぜ黙る」

一時間も歩く前に倒れていそうだから とは、口が裂けても言
つてはいけない気がした。
すると二人の会話に割り込むようにメリアは、

「ソレイン村が見えてきましたよ。あそこにフェラル様がいらっし
やると思います」

綺麗な声で、頬を赤らめながらフレリアに言った。
その視線にただならぬ熱のこもった気配を感じたが、ライトリーク
は見なかったことにする。
否、気にしては負けだと言い聞かせる。

しかしフレリアはさも当然と言ったような振る舞いで、そうか、と
答えた。

目の先には、ソレイン村。
一ヶ月ほど前、フェラルと別れた村だ。

この村では少しの間だったが、良くしてもらっていた。

領主とはあまり関わらなかったが、少なくとも村の人たちは皆親切だった。

元気にしているだろうか と思ったとき、信じられない光景が目に入ってくる。

見間違いではないか。

これは夢だ。夢であってほしい。
そう願うが、五感に現実味のある特徴的な感覚が吸い込まれるようにして入ってくる。

人の叫び声と、唸り声。

硬い『もの』と『もの』がぶつかり合う音。

大きなものが崩され、焼かれる音。

鼻にツーンとくる、異臭。

ライトリークはすぐさまに走り出した。

目の前で起こっているこの出来事が幻覚であるようにと願って。
フェラル・リルチルドという男の姿を探し、村に足を踏み入れる。

村に入ると一度目をこすり、辺りを見渡す。
だが、ライトリークの目の前に突きつけられたのは、酷い現実だった。

第十一部（後書き）

お気に入り登録等々、ありがとうございました！
感想などくださると幸いです。
お待ちしております！

第十二部

目の前に起きていることは、訓練された兵と、まともに物を武器として握ったことの無いような平民の、殺し合い。

兵はすでに民だということにもお構いなく、向かってくる敵を殺し、他と戦っている人を背中から殺す。そのたびに苦痛な悲鳴が聞こえ、鈍い、肉の裂けたような嫌な雑音が響く。

ただ、殺されているのは平民だけではなく、兵もまた死んでいく。斧や鎌、クワなどで刺され、引き裂かれ。

剣の機能を　人を殺すための機能を備えていないだけ、攻撃を受けた兵はこの上ない苦痛を味わい、長くにわたってもがき続ける。誰かが止めを刺さない限り、ずっと。

目の前で死んでいく人たちのほとんどが、顔見知りだった。この村に滞在したときに、楽しいひとときを過ごした人たち。

彼は呆然と立ち尽くした。足が震え、体が動かない。

どちらも殺されたくない故に、全力で相手を殺そうとする。自分が生き残るために誰かを蹴落とし、踏み台にする。

本当の、生命をかけた殺し合い。
誰の目を見ても、憎しみの光と、悲しみの光しかライトリークには
見出せなかった。

目の先で、まだ若い男が後ろから殺されそうになる。
助けに行かなければ。

そう思うのに、足が動かない。
それどころか体が硬直し、指一本動かせない。

初めて見る、人と人との殺し合い。

いくら彼が名家の家の生まれだろうと。

いくら彼が幼き日より訓練を積んでいようと。

いくら彼が天賦の才に恵まれていようと。

理論ではなく、感情が。

頭ではなく心が。

彼の言うことを聞いてくれない。

男の背中に振り下ろされようとする剣。

男はそれに気づいているが、到底避けきれない。

男が目を瞑り、死を覚悟した。

（動け。動け。動け。動け。動け！）

何度も念じるのに、体は一向に動いてくれない。

助けられないのか。

自分は何もせずに、目の前の男を、親切にしてくれた人たちを見捨てるのか。

助けなければいけない。

理由がどうであろうと、この殺し合いをとめなければいけない。

そう思うのに、体が動かない。

視線が、今にも剣が背に刺さろうとしている男から離せない。

あ、殺された　　そう思った瞬間、見覚えのある矢が、兵の腕を貫通した。

銀色の矢。

そんな微妙なものを使っているのは、彼とともに旅をした男以外に考えられない。

矢の飛んできた方向をなんとかたどると、弓を構えた、金髪碧眼の優男のような青年がいた。

放ち終わると、すぐに次の攻撃に移る。

次々に兵の足や腕を打ち抜いていくフェラル・リルチルド。

その素早さはやはり、すごいと言えない。

だが、今の彼は憎しみと悲しみの入り混じった、他の村人たちと同じ瞳をしていた。

この村に、一体何があったのか。ライトリークは疑問に思う。

と、そのとき。フェラルの間合いをいくぐって、攻撃を仕掛けてくる兵が二名。

弓矢は中・遠距離には有利だが、近距離には向かない。

気がつけば、震えていた足はフェラルのほうへと歩を進めだし、硬

直していた指は剣を力強く握っていた。

すぐにフェラルの元へと駆け寄り、兵の足首を剣の腹で殴る。

「があ……！？　ぐ……　あああああああああ！？」

ありえない音が兵の足首から聞こえ、兵は絶叫とも言える声で叫びだした。

骨が、砕けたのだ。

折れたのではなく、砕けた。

一見慈悲のように見えて、死ぬことなくこの上ない痛みを味わう相手からすれば最悪の攻撃方法だ。

だが、まだライトリークは人を殺したことが無い。

まだ、その覚悟もできていないのだ。

そんなことをフレイアに知られたら「魔物は殺すくせに」と難癖つけられただろう。

しかしまだ、ライトリークには人を殺したという罪を背負って生き続けられるほど、強い精神の持ち主ではなかった。

もう一人の兵の腹部にも、剣の腹で打撃を加える。

肋骨の折れた音と、骨が内臓に突き刺さる音がやたらと聞こえ、兵は声にならない声で叫んだ。

そしてすぐに異物を吐き出し、失神する。

そして最後に、剣の腹で　これは力をかなり抜きながら　フェ

ラルという男の頭部を殴った。

「いゝ!？」

ガゴンツ、という鈍い音が響くと、フェラルは驚いたような表情でライトリークを見る。

「なにするんだい、ライト!」

「うるさい! それはこっちの台詞だこのスケコマシ!」

「なっ……! 君は本当に……って、なんでここにいる!？」

「お前を探しに戻ってきたんだよ」

「あ…、なるほど。じゃあ魔王サマは倒せなかったのかい?」

「いや、仲間になった」

「へえー……って、はあああ!？」

一瞬で戦場にそぐわない雰囲気になったかと思うと、久しぶりの再会としては少し（フェラルにとっては）デンジャラスな会話をする。

「それより、この状況を説明しろ! なんで皆が戦って え

？
「

いいながら辺りをもう一度見渡すと、その場にいる人が、なぜか全員眠っていた。

第十二部（後書き）

殺し合いに「デス・マッチ」とルビをふるかどうかで十分くらい悩みました。

結果、ルビをふる必要性を感じなかったので断念w

感想、評価などお待ちしております！

第十三部

「え、なんで？」

「……………」

フェラルとライトリークの頭上にはハテナマークが今にも浮かび上がろうとしている。

突然今まで戦っていた人達が皆眠りにについているのだから、そういった反応も仕方がない。

ただ、フレイアはそう思っではくれなかった。

「ド阿呆！」

「うっ」

いつの間にか後ろにいたフレイアが本気でライトリークの頭を殴る。そして、眉間にしわを寄せながらライトリークに説教をし始めた。

「状況の説明を聞く前に民の戦いを止める馬鹿者が！
お前達が言い合っている間にも死人が増えていくのだぞ！」

「す、すまん」

面食らったライトリークは、気まずそうに目を逸らす。
確かに、今ここで戦いが進んでいるというのに、フェラルにのんびりと状況を聞いている場合ではなかった。

一刻も早く戦いを止め、怪我人や死人を減らすことが先決で、状況理解はその後からでも遅くはない。

感情に流されるのはライトリークの悪い癖だ。

と、そこに取り残された人物が一人。

フェラルが物珍しそうにフレリアを見ていた。

「誰だい？」

「俺の仲間。クリフォンス・フレリアだ」

「へえ……ずいぶん可愛い女性じゃないか。
初めまして、フレリアちゃん」

と、キザっぱい笑みと同時に差し出された手を、フレリアは握り返す。

普通に握手を交わす二人。

フェラルもこの女が魔王だなんて、少しも思っていないだろう。

「初めまして、フェラル・リルチルド。」

ところで、今の状況を説明してもらってもいいだろうか」

「あ……すまない。他の者にはとても言えるような事柄では」

「重々承知だ。」

というか、大半はすでに知っているのだがな」

「へ？」

突拍子もない彼女の言葉に、フェラルは声を漏らした。

なぜ、ここにいなかったはずなのに、知っていると言えるのか。

フェラルの疑問は当然といえる。

フレイアは旅に出た後、夜の時刻など、休憩時に水晶を通してこの状況を観察していたのだ。

だが、それを口に出すことはなかった。

「反乱の理由も、体外は把握している。
聞き方が悪かったな。」

今、ここで戦っている者たちを静める実力がお前にあるのか？」

フレイアの瞳が、鋭く光る。

それは16歳の少女にしてはあまりに重みのある言葉だった。

その一言で、すぐにフェラルは悟る。

この少女は普通に、幸せに過ごしてきた女ではない、と。

人の いや、生き物の命の重みをしっかりと理解している目だと。

意を決したように、フェラルは表情をかえ、言葉を発する。

「僕達は領主の首を取った。

自分達の命の危険がなくなれば、戦う必要もなくなるだろう」

「では、この兵等が静まれば、この村の者達も静まるのだな？」

「おそらく」

「そうか。では、ライトリーク」

「へあ！？」

突然振られた会話に、素っ頓狂な声をあげるライトリーク。

自分には理解しがたいことだと思い、草いじりに行動を移していたせいで手は土だらけだった。

「……………別にするとは言わないが、もっと周りの言葉に耳を傾

け、状況を把握したらどうだ？」

「そうしようとしたらすでにフレイアが知っていて話を飛ばしたんじゃないか！」

「まあ、否定はしない」

「むっかつくなあ、お前」

無表情で告げるフレイアに、ライトリークは齒をかみ締めた。
言葉では勝てない。

そんなことは魔王の城で十分すぎるほどに理解している。
それ故か、これ以上続けようとはしなかった。

パン、パン、と二度ほど手についた土を払うと、もう一度フレイアのほうを向き、先ほど言おうとしていたことを問う。

「で？」

俺に何をしろって言うんだ？」

「ああ、お前、十貴族だったな。
だったら」

第十三部（後書き）

今日で2011年が終わり、2012年が始まります。
皆さん今後もよろしくお願いいたします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1931y/>

勇者と魔王は協定を結んだ。

2011年12月31日16時01分発行